

「号外—————！」

正門を通り抜けようとしたとき、そういつて手渡された紙を、彼女は何気なくみる。
そこには、こう記されていた。

“バスケ部、初の全国制覇なるか！？ 今週末、いよいよ決勝戦！！！”

選手がひとりひとり、写真付きでのっており、決勝に向けたコメントが一言ずつのせられていた。“絶対勝ちます。”“今年こそ優勝します。”そんな前向きなコメントばかり。しかしひとりだけ、「勝」という文字を入れないコメントを書いていた選手がいた。

芹沢一樹だった。

彼は写真でこそ真剣な表情を浮かべているものの、そのコメントはどこかよそよそしくみえた。“精一杯、がんばります。”もちろん、それが悪いということはない。どんなにがんばっても勝てるとは限らない。

しかし、それでも勝ちたいと書くのが、この場にふさわしい対応ではないだろうか。

空気の読めない人ではないのに。

彼女は、彼のコメントを何度も何度も読み返した。

精一杯、がんばります。

まるでどこかで、勝つことを放棄しているようなその言葉は、違和感をもって紙面に浮かんでいた。

「お先に失礼しますね」

そういつて、後輩が出ていくと、残ったのは月子ひとりだけになった。

彼女は来週提出のレポートを仕上げようと、今日は徹夜の覚悟でここに来た。だからひとりになることも想定内のうちであり、静かになった部屋のなかは、むしろ彼女を歓迎しているかのようにすら思えた。

彼女の席は窓側で、カーテンのない窓からは、月がよくみえた。しかし今夜はあいにくの曇り空で、外は真っ暗だった。いまにも雨が降り出してきそう。彼女は、愛用しているブルーのマグカップを手にすると、給湯室へ向かった。眠気覚ましに、濃いのが飲みたかった。

給湯室のポットは、ちょうど沸騰中だった。赤いランプが点滅している。彼女はため息をつく、仕方ないな、とつぶやいて、カップを手にしたまま、階段をおりた。1階には自販機がある。味はだいぶ落ちるが、このまま手ぶらで戻るよりはいい。

コインを入れようとしたとき、何か音が聞こえた。最初、雨の音かと思ったが、よく聞くと、もっと固い音のようだった。しかも周期が、雨よりも遅い。彼女は音の正体を知りたくて振り返り、そこに渡り廊下をみつけた。扉が開けっ放しになっている。渡り廊下の先は、第二体育館だった。音は、そこから聞こえてくるようだった。彼女はしばらく、その音を聞いていたが、やがてコインを入れるのをやめて、財布に戻した。

近づくほどに、音の響きが強くなる。渡り廊下を歩きながら、彼女は鼓動が早まるのを感じた。音の正体を、自分の目で確かめたかった。もし彼女の予想通りだとしたら……、自分は何をしようとしているのか、彼女自身、把握できずにいる。

体育館のドアは、わずかに開いていた。誰かが閉め損ねたのかもしれない。そこから音が漏れ出しているようだった。彼女はその隙間を、少しだけ広くした。入っていく勇氣はなかった。明かりは煌々としていて、そこにいるのが誰なのか、すぐにわかった。

彼はひとりで練習していた。けれども、まるでそこにだれかがいるようでもあった。彼の動きは、個人練習とは明らかに違い、仮想の敵を目の前に、イメージトレーニングしているようだった。ドリブル、フェイント、ターン、シュート。どれも鮮やかだったが、何度繰り返しても満足できないのか、同じ動作を繰り返していた。やめる気配どころか、休憩する気配すらない。いったいどれだけ続けていたのか、彼の全身は汗でびしょりで、けれどもぬぐうことさえせずに、一心不乱に練習していた。

彼女は、そんな彼の姿から目を離すことができなかった。さすがに表情までは見えない。それでもどうしてか、彼が苦しんでいるのがわかった。背中が、肩が、動きが、すべてが、苦しそうだった。

どのくらいの時間が流れたのか、気づくと、ボールが彼女のほうに転がってきた。どうやら汗で手がすべったらしい。彼はボールを追うように視線を動かし、そして扉の隙間に、彼女を見つけると、凍り付いたように動きをとめた。彼女はかがんで、ボールを拾うと、扉を開けて、靴を脱ぎ、中へと入った。

彼はまだ動けずにいる。彼女は、素足で一步一步、彼へと近づいた。

「はい」

ボールを差し出しても、受け取ろうとしない。
ただ、じっと何かを見つめるように、視線を動かさない。
すくなくとも、それは彼女に向けられていなかった。

「せりざわくん」

そう呼ぶと、彼はようやく、表情を動かした。

「いつからいたの」

それはひどく緊張した声だった。

「声、かけてくれればいいのに」

「邪魔してはいけないと思って」

「ずっと、みてたの？」

彼女はうなずいた。彼は参ったといったように息をつくとき、表情を隠すように、髪をかき上げた。

「趣味悪いぜ。覗き見なんて」

冗談めかしてはいたが、本気で、怒っているようにもみえた。

「練習、していたの？」

「そう見えなかった？」

「うん」

彼女は、嘘がつけなかった。

「すこしも、楽しそうにはみえなかった」

彼は苦笑いし、ようやく彼女からボールを受け取ると、そのまま背中を向けた。ゴールに向かってドリブルし、シュートを決める。ネットを通過したボールが、床にはずんで音を立てた。バウンドは次第に小さくなり、ボールは転がり始める。

彼はゴールの下で、ボールの行方をぼんやりとみつめていた。

「バスケットが、好きではないの？」

彼女はその場を動かなかった。そのままの距離を保って、問うた。

「夢中になれるのは、楽しいからなのだと思っていたのに」

「幻滅した？」

彼は小さく笑った。とても自嘲的なほほえみだった。

「あなたの言葉は、まっすぐできれいで、とても好きだけれど……、オレには少し遠すぎるよ。それがわかったから、離れようと思ったんだ」

心当たりがあった。ある時を境に、彼は近づいてこなくなった。だから、そもそも彼は世界が違っていたのだと、思っていた。仲良くなれそうな気がしたのも、自分の勘違いだと思おうとしていた。それでもよかった。彼と出会う前の日常も、決して悪いものではなかったのだから。

「……、ひどいことを、してしまっていたのね」

無意識のうちに、人を傷つけてしまう。自分はそういう人間なのだと、改めて思い知らされた。

「ごめんなさい」

「そうだね。あなたなら、そういうんだろうね」

彼はわずかに頬をゆがめて、ほほえんだ。

「いいよ。もうわかったから。早く帰りなよ。こんな時間に男と女が二人きりなんて、ど

うなっても文句は言えないぜ。ほんとあなたは危機管理能力がゼロだね。でもそんなところも、可愛いなって思うけど……。もうオレに近づかないでくれ」

いつもはあれほど明るい色の瞳が、いまは屈折して暗い光を宿していた。それで彼女は、彼がそれを本心で言っているわけではないのだと、わかった。むしろ、その言葉は、彼自身を苛んでいるかのようだった。

彼女は、途方に暮れた。どうしたらいいのか、わからなかった。彼の望みが、彼の言葉にないのだ。それでも、まったくの嘘ではないのだろうと考えて、彼の言葉の中から、なんとかできそうな部分をみつけようとした。

彼女はとりあえず、思いついたことを口にした。

「わたしはまだ帰りたくないの。だから、どうなっても文句は言わない」

彼は信じられないといったように、彼女を見た。

「あなた、何を言っているのか、わかってるの!？」

「わかってる。わたしは、ここにいたい。だから責任を持つとっている」

「責任って……」

「今夜、ここで何が起きても、かまわない。だからここにいるのを許して」

彼女は真剣だった。とにかく、帰れという言葉を取り消してもらいたくて。それは彼女にとって、いちばんつらい響きを持っていた。

「は……。冗談にしちゃ、タチが悪すぎるよ。いまのオレは、笑える余裕なんて」

「——いい加減にしてくれないかな」

彼の弱気な態度を見て、彼女の中の何かが、ぷつつりと、切れたようだった。

「アナタねえ、わたしの言葉が信じられないの？ 冗談？ はん、ふざけるなっの。こっちが本気なんだから、アナタも本気で答えなさい。もう一度だけ言うわよ。これから何が起きても構わない。それでももう顔も見たくないと言うのなら、ここから今すぐ立ち去るわ。アナタの本当の望みを言いなさい」

ほとんど豹変に近い彼女の態度をみて、彼は最初、あっけにとられていた。気づくと、笑いだしていた。肩を震わせての大爆笑。本人の前で、まったく遠慮がなかった。

「なんだよ、それ、反則だろ。ああ、あなたは月だものね。裏と表があって当たり前だよ
ね。にしても」

そして、再び笑い出す。それまでの空気はどこへいったことやら、気の済むまで笑って
いた一樹は、ようやく笑いを収めると、どっかとその場に座り込んだ。肩から力が抜けて
いた。

「まったく、マジ、反則すぎ。あーあ、なんかもうどうでもよくなった。考えてたこと、全
部忘れた。オレにどんな魔法かけたの、月の女神様」

いつになく表情が柔らかかった。ふだんのやさしい表情とも違い、さっきまでの頑なな
ものとも違い、まるでそれが素であるかのような、力の入らないゆるさ。

「ルナでも恥ずかしいのに……女神って、……死にそう」

「ああ、だめだよ。せめてオレの腕の中で息絶えてよ」

「だからそういう恥ずかしい台詞を」

「こっち来てよ。力が抜けて、立てないんだ」

「なによ、さっきまで、帰れとかいってたのに」

ぶつぶつ言いながらも、彼女は素直に言葉に従う。

そして彼の前まで来た瞬間、腕をつかまれ、引き寄せられた。

彼女はバランスを崩して、彼の胸に倒れこむ。

「ちょっ———?!」

「今のオレの望みは」

彼は彼女の頬に触れると、まっすぐに瞳を向けた。

「あなたにキスしたい。ルナ……いやなら、拒んで」

なにそれ、と思う間もなく、彼の唇が彼女に触れた。

彼女は目をつむるどころか、ぼうぜんと彼の顔を見つめて、つぶやいた。

「これが、キス？」

「……もしかして、はじめて、だったとか？」

「うん。でも、よくわからなかった」

だからもう一回、とでもいうように、今度は彼女のほうから、近づいた。
彼は彼女の背中に腕をまわすと、そのまま、受け止めた。
最初は、おそるおそる。
けれども次第に、それは深くなっていき、彼はあわてて、彼女を止めた。

「ちょっ、まずいから」
「なんで？」
「なんでって……」
「もっと、知りたいの」
「だから、そういうことを軽々しく言わないの」

きつめに言うつもりが、その声は、どこまでも甘くて。

「まったくあなたは、ほんと、もう」

泣きだしたいような、笑い出したいような、不思議な表情で彼はほほえむ。

「今夜はこれくらいで、勘弁してよ。じゃないとオレ、自分に責任持てない」
「わかった」
「ルナ、……月子さん」

言い直すと、彼はたたずまいを整え、彼女に、向き直った。

「順番が逆になっちゃったけど、はっきり言っておくから」

彼女の手をとり、そっと持ち上げて、甲にくちづける。

「あなたのことが好きだ。これからもずっと、そばにいてほしい」

そういつて、じっと彼女を見つめた、その瞳の中に、あふれるほどの想いと、そしてわずかな不安が、にじんできた。

「オレの恋人になってくれますか」

ああ、彼はとても不器用なのだ、と彼女はそのとき気がついた。

そして誠実だ。こんなふうに言葉で自分の想いを伝えることができる。それは彼の心がまっすぐだからこそ。

「あの……………わたしは」

その誠実さには、誠実さで返さなければならないと思った。

「恋人とか、突然いわれても困る……………いままで、男の人とあまり話したこともない。なのに、いきなり付き合うなんて、無理だと思う」

彼は黙って彼女の言葉を聞いていた。手は握ったままだった。かすかにふるえているのに気がついた。彼は安心させるように、もう片方の手で、そっと、触れた。

「オレのこと、こわい？」

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「一緒にいたくないとか」

「そんなことない」

「じゃあ、何が不安？」

「……………また、傷つけるんじゃないかって」

彼女は、途方に暮れたような顔で、彼を見つめた。

「わたし、無意識に人を傷つけてしまうみたいなの。そうしたいわけじゃないのに、いままでずっと、そうだった。あまり親しくない人でさえ……………、だから、一对一の関係を築く自信がない」

「けど、あなたはさっき帰らなかったよね。オレがいくら言っても」

「それは……………、放っておけなくて」

「今夜は、あなたの方から近づいてきた」

「頭に血が上って」

「いまもこうして、逃げずにいる」

「それは」

「それは？」

問い返されて、彼女は考える。自分がここにいる理由。

あのチラシをもらったときから、いや、もしかすると、はじめて会ったときから、ずっと、近づいてはいけないような、近づきたいような、矛盾する想いを抱えていた。

いまその人が、目の前にいて、自分を見つめている。

求めるような切なげな光と、いたわるような優しい光とが、彼の瞳の中で混ざり合い、彼女はその色が、とても美しいと思った。

「わたし、は」

はじめてだった。こんな気持ちは。だれかのことを考え続けるのも、その心に触れたいと思うのも。触れてもらいたいと思うのも。

彼女は、その想いに押されるように、口をひらいた。

「あなたのことを、もっと知りたい。あなたの世界に、かかわりたい。だから、ここにいるのだと思う」

そうやってしまうと、心がふわっと、軽くなった。

それで、もう長い間ずっと、彼女はだれかにかかわりたかったのだと、気がついた。

だれでもよかったわけではない。その相手が、彼だったからこそ。

けれども同時に、それを押しとどめる声があった。

「でも、わたしはあなたを傷つけない」

矛盾する気持ちが、彼女の心を迷わせる。

彼はほっと息をつくとき、手を離し、彼女を抱きよせた。

瞳と瞳を近づける。まるで自分の気持ちを、全部伝えようとするかのように。

「あのね、いまここで、あなたを失う以上につらいことなんて、ないよ。たとえこれからどんなことがあっても、いまここであなたが去っていくよりは、よほどマシなんだ。オレも、あなたのことをもっと知りたい。あなたの世界に、触れたい。だから逃げないで。リハビリが必要だっていうんなら、いくらでも付き合うから、さ」

「せりざわくん……」

「イツキ」

「……男の人を呼び捨てになんてできない」

「またそういうことを。信じさせてよ。オレ、いま、夢をみてるみたいなんだ。朝になったら、全部消えてなくなってしまうようで……。だから、オレに決めて、はじめて呼ぶ男の名前」

「……いつ、き？」

ほとんど聞き取れないような、ささやくような声だった。

彼は、たまらないというように、顔をそむけた。

「すげー、恥ずかしい」

「だ、だからいやだって」

「緊張が、こっちまで伝わってくる。まいった……」

彼はそのまま立ちあがると、ステージ横にある時計を見た。

「もう2時過ぎだ」

「え?!」

「送っていくよ。家はどこ？」

彼女はあわてていった。

「今夜は帰らないから」

「———!？」

「レポートを仕上げる予定なの。貫徹覚悟」

「ああ、だからその恰好」

「ちょっとコーヒーを買いに来ただけだったのに……」

「いったい、いつからいたの」

その時間を聞き、彼は信じられないといった顔で振り返る。

「そんなにずっとみてたの?!」

「うん……、そうみたい」

「なんで」

「なんでって」

彼女は、そのときのことを思い出しながら言った。

「楽しかったから、かな」

彼は、わけがわからないといった顔になる。それに気づかず、彼女は続けた。

「何かに夢中な人は、それだけでとても、人を惹きつけるような気がする。いくらみても飽きない。むしろ励まされるっていうか、自分も頑張ろうって気持ちになるし、それにあなたはとても綺麗だったから」

思い出すように目を閉じると、さっきまでの光景が、浮かんできた。

繰り返し繰り返し、練習する彼の姿。

たしかに動作は単調なのかもしれない。

けれども、そこにある精神は、そんな言葉では表現できなくて。

「残念だけど、オレの場合、そんな崇高なものではないよ」

彼はどこか自嘲的な感じのするほほえみを浮かべて、言った。

「じっとしていられなかっただけで、ただのガキと同じさ」

彼の心を駆り立てるもの。それがバスケへの情熱じゃないのだとしても、たしかにそれは、そこに存在している。

「このまま研究室に戻るの？ だれかいるの」

話を切り上げたいのか、彼は彼女の手を取ると、引っ張るように歩き出した。

「ううん。今夜はひとり」

「ひとり?!」

「よくあるよ。いまさらどうってことは」

「よくあるの?!」

彼女のフォローは、やぶへびだった。

「理系の研究室なんて、そんなものだから」

「それは知ってるけど」

「いままでも何度もあったし」

彼は、考えるようなしぐさをしたが、更衣室の前まで来ると、いったん保留にした。

「ごめん。タオルとってくるから、ちょっとだけ待ってて」

そのあいだ、彼女も自分の靴を取りに行った。

「着替えないの？」

「ん。ちょっとからだを冷やしたいから」

言われてみると、彼の手のひらから伝わる体温は、だいぶ高い。

「いいな。男の人は。あったかくて」

そんな言葉を、ぼろっと口にする彼女。

彼はクスッと笑うと、つないだ手に力をこめた。

「いつでもあっためてあげる」

「うん」

その返事は、あまりに素直すぎて。

「……………」

何も言えなくなる一樹だった。

そうしているうちに、彼女の所属している研究室に到着した。

「レポートって、家でできないの」

彼は、人気のない部屋を見て、心配そうな顔になる。

「できなくもないけど、資料とかデータとか、ここには全部あるし」

「仕方ないか」

彼は彼女に、メモ帳とペンを借りると、そこに自分の番号とアドレスを書いて渡した。

「何かあったら、絶対連絡すること」

彼女は、自席に戻ると、カバンをごそごそしたが、やがて申し訳なさそうに言った。

「忘れてきたみたい、携帯」

「家に？」

「うん。めったに使わないし」

彼は、彼女をやさしくにらんだ。

「これからは、ちゃんと持ち歩いてよ。連絡とれるようにさ」

「……妹にも、そういわれる」

「ああ、このあいだの？」

「うん。花ちゃん。いつも怒られてばかり」

「自業自得デショ」

「むう」

あまりの言われように、彼女もまた、反論に出た。

「言わせてもらえば、あなたも少し過保護すぎると思う。大学生が研究で徹夜なんて当たり前のことなのに、いちいち心配していたら、この先とてもやっていけない。わたしはあなたより年上なんだから、あなたが思うよりはしっかりしている……………と思う。たぶん」

「たぶんって」

そこでせめて言い切ってくればいいものを、彼女はどこまでも正直だった。

彼は大仰にため息をつくど、わかった、と答えた。

「じゃあ最後にひとつだけ。たとえ構内でも、暗い夜道は一人で歩かないこと。いいね？」

「はい」

素直にうなずいた彼女に、にっこり笑うと、彼は軽く手をあげて、部屋を出ていった。

彼女は席に座ろうとし、マグカップがないことに気が付いた。

記憶をさかのぼり、自販機のところに置きっぱなしだったのを思い出す。

それで仕方なく、また階段をおりた。

思った通り、カップは自販機の横に棚に、そのまま置かれていた。

それを手に取り、帰り際、なにげなく振り返る。

彼の後姿がみえた。渡り廊下を歩いている。

そのままみていると、彼は更衣室ではなく、体育館へと入っていった。

しばらく待ってみたが、出てくる気配はない。

信じられなかった。

まさか、このまま朝まで、練習を続けるつもりなのだろうか。

そこまで彼を駆り立てるものが何なのかはわからない。それでも、彼女が思う以上に、彼の抱えるものは深いようだった。でなければ、どうして試合直前に、一晩中練習を続けられるというのだろうか。それも、たった一人きりで。

彼女は、しばらく体育館を見つめていたが、やがて踵を返すと、階段をのぼった。

試合は、今日の午後1時からだった。